

26PB-am133

医薬品有害事象データベースを活用した薬物乱用リスクの評価

○藪内 弘昭¹ (¹耐久医療研)

【背景・目的】

近年、危険ドラッグや大麻が、あたかも煙草やアルコールより安全であるかの如く流布され、多くの若年者が興味本位で薬物乱用に陥っている。また、処方薬である向精神薬を必要以上に連用し、乱用者となる精神疾患が増えている。いずれにおいても、自分なら大丈夫という根拠のない過信があり、揺るぎない乱用防止のためには、統計科学によって裏付けされた危険性データの提示が効果的である。そこで、本研究では、米国の有害事象報告システム (FAERS) を活用し、乱用されやすい物質の種類や条件について分析・評価することを目的とする。

【方法】

FAERS 10 年分の報告のうち、薬物乱用関連キーワードを有害事象に含むものを乱用群、同キーワードを有害事象及び適応症に含むものを再乱用群、いずれにも含まないものを非乱用群と定義した。そして、これらの群間で、薬剤の種類、併用薬、併発有害事象、投与期間、適応症、転帰などを比較分析し、それぞれオッズ比 (ROR) により乱用リスクを疫学的に評価した。

【結果・考察】

乱用群及び再乱用群の ROR は、ヘロイン、コカイン、大麻の順に高く、いずれも 30 を超えた。また、医療用麻薬、抗不安薬、抗うつ薬も比較的高値を示した (5 ~ 10)。乱用群は非乱用群より平均年齢が低い一方、投与期間が長い傾向にあった。乱用群で併発した有害事象の総数は非乱用群より多く、特に抗うつ薬では自殺念慮・不安症状の併発リスクが 2 倍以上高かった。これらの評価は、乱用防止啓発における説得力ある説明資料となり、医薬品適正使用にも繋がること期待される。